

毎年九月下旬に開催される会津まつり。二十三日に行われた会津藩公行列は、秋の会津に欠かすことのできないイベントです。その舞台となる幕末期の会津藩は非常に苦しい立場でのかじ取りを迫られ、ついには滅んでしまいました。老若男女問わず武器を手に官軍に立ち向かう姿は、新島八重を中心に大河ドラマで描かれ、広く知れ渡ることになりました。

ですが、それよりも昔から会津人に強く刻まれているのは白虎隊による自刃の物語ではないでしょうか。私自身、幼稚園の頃お遊戯会での白虎隊の踊りを今でも覚えています。十代の少年たちによるこの悲劇の最後は、鶴ヶ城炎上落城に合わせた自刃として長く伝えられてきました。しかし、彼らの自刃は城と共に命を投げ出すなどということではなく、落城はしていないが会津武士として「武士の本分を明らかにする」との思いから行われたものでした。

民 報 サロ ン

白虎隊の生き残り飯沼貞吉の子孫であり、まさに武士として生きていた飯沼一元氏は白虎隊の会での活動を通して、長く歴史の定説とされてきた白虎隊の最後の真相を明らかにし会津武士の名譽を回復する活動を進められています。ご縁を頂き私も社業を通じてこの活動に関わっています。これまで七人の隊士家跡に石碑と案内板を

白虎隊



古川 一裕

設置しました。

白虎隊は十五歳から十七歳までと、現在の中学生から高校生の年齢によって組織されていました。年齢だけに注目すれば非常に若い少年たちによる決死の出陣であったと思うことができ、この事業に関わる中で感じる隊士の生きざまは成熟した大人そのもの

であり、まさに武士として生きていたことを実感させられます。なぜ彼らはその若さにもかかわらず、会津武士としての信念と自負を持ち合わせ、行動することができたのか。その秘密は当時の教育にあったと思います。教育は時代によって手法は変わりますが、時代を担う自立した人材の育成という目

的は変わりません。彼らの決断と行動からは、当時の会津では人材育成に重きを置き、会津武士道精神に基づき厳格な教育が行われていたことを感じます。人は国を動かす宝です。徹底的に鍛え磨くことが会津の生きる道との信念があったのではないのでしょうか。

来年日本は明治維新百五十年を迎え

ますが、会津では戊辰百五十年となります。同じ出来事ですが、勝者と敗者の視点で捉え方が異なります。しかし両者にはこの国をより良くしたいとの共通の信念があったはずで、官軍が勝利を収め会津は敗れてしまいました。が、国のために尽くす心に勝敗はありません。百五十年前に己の信じる道のために命を散らした彼らの心と、それを育んだ会津の教育から、今われわれは何を学ぶことができるのでしょうか。

小手先に目をくまませず、信念を持ち、本質を見極め、なすべき時に事をなす。その日のために、自らを律し行動できる人を育てる。確かな判断基準を持ち、自立した人材を育てることが地域を育て国を富ませる。戊辰から百五十年がたち、世界の中で日本という国がどのような人材教育を行うべきであるかを、白虎隊の自刃がわれわれに教えているのではないのでしょうか。

(喜多方市塩川町、古川石材店社長)